



わだ いとちゃん
(3さい)

レストランで はたらきたいな。だいすきな ハンバーグや アイスクリームをつくるの。かっこいいレストランに するから みんな きてね。



奥春別荘の保育園のおともだち



いたがき あおちゃん
(3さい)

おかあさんに ケーキやさん ハンやさん えほんやさん アイスクリームやさん... になりたいものが いっぱい あるの。でも いまは もうとが ほしいんだ

がんばっているあなたがすき

シリーズ・ひと

日常の幸せを拾っていったら

北海道人形作家協会公募展で北海道教育長賞を受賞した

江口 佑子さん(69歳・美里4)



北海道人形作家協会の公募展で北海道教育長賞を受賞した江口さん。これまでも北海道知事賞をはじめ数々の入賞歴があります。創作人形との出会いはいつだったのでしょうか。

「親友から「娘に縫いぐるみを作ってあげたいから教えてほしい」と言われ、40年ほど前に2人で縫いぐるみの人形作りを始めました。人形作りの仲間も増え、町の文化祭などで発表してきましたが、だんだんと作風もリアルなものへ変わっていき、もつとりリアルなものを作りたいと思い始めたころ、親友が粘土の人形の本を紹介してくれたんです。「こういうものを作りたい」と即座に思いました。ですが、本に作り方が書いてあるわけではありませんし、近くに教えてくださる先生もいない。全くの独学で人形作りを始めました。それが11年前のことです。

物を作るのが、もともと大好きだったのです。

「物のない幼少時代、布団のほつれから綿を取り出しては、人形らしき物を作っていた子どもでした。その綿の出所がどこか、母は当然分かってはいたはずですが「上手ね」と褒めてくれました。私のきょうだいも創作が好きで、みんな創作や造形といった趣味を持っています。振り返ってみれば、両親共に物作りが好きでしたし、両親から受け継いだものと、それを育む環

境に恵まれていたのだと思います。感謝しています。

作られる人形は皆表情が豊かで、情感にあふれています。

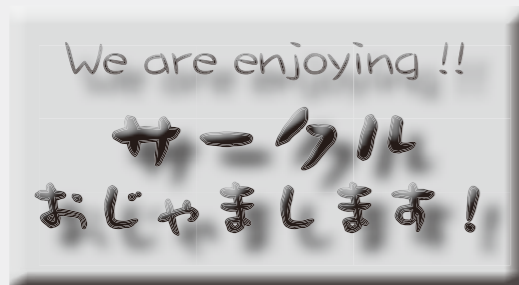
「独学だったからこそ、逆に独創的に作ることができたのかもしれない。題材は身の周りや家族の様子から見つけますが、おじいちゃんや孫、母と子など、ごく普通のことごとくも幸せなこと。それは見てくださる皆さんも同じで、だから共感を得られるのではないかと思います。

人形作りの魅力は。

「創作そのものが大きな楽しみであるのはもちろん、人形を通して幸せな出会いに恵まれることですね。自分が好きで作っているものが、皆さんに見ていただくチャンスを得て、しかも喜んでいただけるのは、とても光栄なこと。これまで各地で個展を開催させていただきましたが、それぞれすてきな出会いがありました。7、8月には道の駅摩周温泉で開催しましたが、このときも全国各地の方に見ていただきました。また、ギャラリーのある道の駅は珍しい、素晴らしいと仰っていただいたのも、地元の人間としては大変うれしかったです。

今後の抱負は。

「人生の大きな楽しみとして、感性と腕を磨いて、ずっと作り続けていきたい。そして、人形作りを通して、日常の幸せを拾っていったら...と思います。



摩周蝦夷太鼓保存会
代表・小澤 重則 さん
会員・12人



摩周蝦夷太鼓保存会の皆さん
2列目の右から2人目が代表の小澤さん

摩周蝦夷太鼓保存会は1996年設立の郷土芸能の会です。昭栄小学校(奥田泰朗校長)の児童6人が中心となって活動しています。

設立のきっかけは、同校の当時の教頭



練習の様子

代表の小澤さんは「太鼓は、学校だけではなく地域でも子どもたちの教育を行ってきた、この自治会ならではの取り組みだ」と思っています。大人も子どもも、太鼓の技術はもとより、人とのつながりの中で大きくなっていく、こればいいと思えます」と話していました。

先生が「子どもたちが郷土芸能に親しむ機会が欲しい」と考えたこと。そこで、もともと交流のあった北海道くしろ蝦夷太鼓保存会から指導を受け、自治会の協力を得ながら会を立ち上げることにしました。現在は、同会の正式な管内組織となっていて、釧路から指導者が来て練習をする日もあるそうです。

学校の取り組みとして始まったため、児童が活動の中心。小規模校ということもあり、児童の卒業後はなかなか会員が増えないという時期が続きましたが、今年は大きな動きが。「子どもと一緒に太鼓をやりたい」という保護者の方が加入して、より力強い演奏となっています。

主な発表の場は、南弟子屈文化祭や町の総合文化祭、摩周の里夏まつり、JA摩周湖農業祭など。ほかに、特別養護老人ホーム摩周や厚生病院の慰問なども行っています。